

日本キリスト教会大阪北教会

2016年11月20日 聖日礼拝説教 牧師 森田幸男

『おびえるな。キリストが平和を賜る』

《説教》

先週先週、第2聖日に私たちは召天者記念礼拝をいたしました。そして私はその時発見者の喜びをもって御言葉をこのようにのべました。父なる神様と主イエス様とが常に永遠にその愛と慈しみをもって片時も離れず私たちを顧み、見守ってくださるように、天に召された主にある兄弟、姉妹たち、肉親たちも神様、イエス様と共に、私たちを見守ってくれているのです。そしてそれは何があっても途絶えることはないのです。そしてそのことを実体験した無数の証人たちもわたしたちを見守ってくれているのだ」そのように申しました。これはある意味では目新しいことではありません。けれども聖書が証しているこのことを本当に聖書にそう書いてあるではなくて、私自身を実体験としてこの御言葉を味わうのであります。

??? 本当に1週間前のある日は神様の祝福の中で過ごしました。それで主の日というのはこうでなければならぬ。このように説教も礼拝の司会も献金も、そして皆さんの管理も本当にこれは信仰と感謝に満ちたものでなければ。恵みの神様に対する礼拝の名に値しないと思います。・・・私たちは神様の喜んでくださる礼拝に値することができたのでないでしょうか。礼拝が終わって皆さん帰られる時に、・・・そしてともこさんが涙ながらにおっしゃいました。「私が母を送ってからずっとそのように思い続けたこと、母が私を見守ってくれるのだということを先生が???で話して下さって・・・肉親が後に残した者を見守ってくれているという感覚はクリスチャンでなくても・・・感覚の中にあると思いますね。それは悪いことではない。そういうことを私は聖書を通して、そうだったんだということを再認識いたします。そして見守ってくれるのが自分の家族、肉親だけではなくて過去に亡くなったすべての1人1人が、全ての国の人々が本当に・・・そのことを私は感じてこの間召された弟の家族もそのような見守りに委ねよう。昔苦小牧教会にいました時にある婦人が「私は愛心がいるので・・・」と口癖のように言たのを思い出します。我々親族ですけど、私が弟を思うのと妻や娘がお父さんを思うのは違うと思います。それでわたしはわたしに与えられた信仰に与ってほしいという思いを強くいたしました。そのようなことをわたしたちは先週身をもって経験して感じました。それで私は今日も聖書の御言葉を読みながらこのように、神様の、イエス様の、そして召されたすべての人々も私たちを見守ってしてくれる。これは事実なのです。けれども、それが・・・神様なのです。ここにはなお、見守ってはいてくれる、これは事実なんです。なんだけれどもそれが・・・神様mなのです。ここにはなお、みまもってはいてくれるのですけれども、ほんの・・・私は神様に不足を申しあげるのではなくて、そのようなこともある・・・ということなんですけれども。しかし今日聖書のみ言葉を読みながら。神様の、イエス様のご配慮という

のは、我々人間が思いやる程度のことではなくて、必要な顧みをしていてくださる、そのことを今日の聖書が私たちに示していてくれると思います。

先週も今日も礼拝の冒頭で聞きました詩篇 117 編

この一番短い詩篇、この内容というのは私たちが崩すことはできない。そしてここに本当に神様の崇高な配慮が伺えると思います。「主の慈しみとまことまことはとこしえに わたしたちを超えて力強い」。これは何回も申し上げました。主の慈しみとまことは、わたしたち人間の理解をはるかに超えている。本当に神様のご配慮というのは信仰なのです。欠けがない。慈しみに満ちあふれているのです。そしてもう一つ、「主の慈しみとまことはつねに、とこしえに、私たちを力強く覆い、包み込んでいる。この2番目の意味合いが今日のみ言葉が私たちに語ってくれていることだと思います。もうすでに読んだところですけれども、イエスさまは・・・親切でピリポこう言われました「ピリポ、こんなに長い間一緒にいるのにわたしを分かっていないのか。わたしを見た者は父を見たのだ。」このヨハネによる福音書ほど父なる神様とイエス様が一体の方であられる「私を見た者は父を見たのだ」こうイエス様はおっしゃいました。また14章の24節、「あなたがたが聞いている言葉はわたしのものではなく、わたしをお遣わしになった父のものである」つまり、父なる神様はイエス様と一体になってみ言葉を語り、御業を行っておられる。」とイエス様ごあなたがたに自身がおっしゃっておられるわけです。14章16節にこうあります「わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにして下さる」イエスさまはここから出かけようといわれえた。どこに向かってでかけるのか。この世の世の支配者たちはイエスを捕えようとしている。イエス様はこの後十字架にかけられる。それに向かって出かけようとしたわけです。で、別の弁護者を遣わして永遠にあなたがたと一緒にいるようにして下さる。この弁護者は真理の霊である。この霊があなたがたと共におりこれからもあなたがたと共にいるからである。わたしはあなたがたを孤児にはしておかない。あなたがたのもとに戻って来る。しばらくすると世はもうわたしを見なくなるが、あなたがたはわたしを見る。わたしが生きているのであなたがたもいきることになる。かの日には、わたあなたがたにしが父の内におり、あなたがたがわたしの内におり、わたしもあなたがたの内にいることがあなたがたにわかる。」とおっしゃっています。「かの日」というのは16節、別の弁護者を遣わして下さる。別の弁護者、真理の霊ということです。そして永遠にあなたがたと共にいるようにして下さる。別の弁護者、真理の霊ということでもあります。それでいかなる場合でもその本人でなければその人の本当の気持ちとかその心にあることを明らかにすることは他人ではできません。しかし今父のみもとにいる時わたしは父におねがいしよう。別の弁護者を遣わして永遠に父はあなたがたと一緒にいるようにして下さる。別の弁護者というのはイエス様の・・・この方は真理の霊・・・？？本当のことを示す霊・・・この霊があなたがたと共におり。これからもあなたがたの内にいる。それが今日の26節では「父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊があなたがたにすべての

ことを教えわたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる」という。ですから聖霊なるお方がわたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる」というのです。イエス様が聖霊なる神様がわたしが話したことを悉く思い起こさせてくださるですから聖霊なるお方がイエス様が話された時。私が話したことをことごとくあなたたちに思い起こさせてくださると言うのです。ですから聖霊なるお方はイエス様が話されたことをことごとく思いおこさせてくださると言うのですからですから聖霊なるお方はイエス様が話されたとき、それはわたしではなくて父が語っておられるのだとさっき言われました、そして御霊なる神様はわたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださると言うのです。聖霊なる神様はイエス様が語られることをことごとく聞いていなければ思い起こさせることもできません。つまり父なる神様とイエスさまと聖霊なる神様とは一体であられる。そしてこんな・・・からもわたしと共にいて、わたしのうちにあって最善な配慮をしてくださる。そんなことイエス様ご自身が・・・しておられるわけです。・・・

もはや我生きるにあらず、キリスト我が内にありて生きるなり。新共同訳では、生きているのはわたしではありません。キリスト我が内に生きておられるのです。となります。信仰があろうがなかろうが、この三位一体の神であられるお方がわたしを包み、わたしのそばにいてくださってわたしわたしの内に生きてわたしの痛み、苦しみをすべて我がものとしてくださる神様なのでrすね。ですから今週私たちが聞いたことは本当に父なる神様もイエス様もすべての召された者たちは、私たちを絶えず顧み、見守ってください。これだけでも私は力を得ました。けれども今日の箇所、神様は聖霊としてわたしたちを包み、わたしたちの内にあって生きて、この信仰ある配慮を途絶えることなくなさってくださるのです。そういうふうにイエス様は・・・いてくださるのだ。そういうことでありますのでわたしたちの日々がどんなに行き詰ったことであってもイエス様は先ほどの言葉のように、さあ、でかけよう、というのは十字架に向っておられるわけですね。それがどんな痛み、苦しき、であろうとそれを我々のために我々に先立って負ってくださったそのお方がわたしと共に、わたしがどこにあっても共に居てくださるキリストが私の内にておられるのです。このような信仰が・・・の信仰ですね。一体なる神様を信じる。・・・本当に神様が私を包み私の内に生きていてくださる。この感覚からわたしたちは遠い歩みをしていただいたのではないのでしょうか。だから神様が共にいてくださらないような時も所も状況は一つもないということです。本当にそのことに目が開かれる時にはこの世の何も与えることのできない。そうだろう。わたしは与える。イエス様は言ってくださったのです。これはパウロの言葉で、ローマ書末尾の証言ですね。

「わたしは確信しています。死も命も――どんな被造物もわたしたちの主キリストによって示された神の愛からわたしたちを引きはなすことはできないのです」。これがわたしたちの今なのです。昨日です。明日なのです。三位一体なる神様にこういう表現をしたのですね。神様を遥拝したのです。神様はお一方です。その神様が一人なる神様として・・・、御霊なる神様として、そのお一人の神様が一人なるイエ

ス様として、父なる神様として、御霊なる神様として、根源の遥拝はまもられるけれど一人の中に慈しみや愛に満ちた神様であられるのです。ということを聖書は語っていて、そういうことを三位一体の神という表現をとったのです。それは聖書が証していることです。ですからわたしたちは天の神様も、イエス様もそして召された者もみんなわたしたちを見守っていてくれる、しかしその神様が、イエスさまが、聖霊として、わたしたちの内において、生きて、わたしの痛みをご自身の痛みとして受け止めて共に歩んでくださる神様が御霊なる神様なのです。ですからわたしたちは、これまでも、これから、いずこにあって、どのような時であっても、どのような状態にあって、…一人であられる神様の崇高な配慮の中に私はある。愛する者を送った者もその中にある。私の家族もすべての人もその中にある。これが私たちの今です。ですからこの恵みをわたしたちは受けて・・・すべてのものを顧みてくださるわけですからあとは本当に、これがわたしのことだったのだ。という信仰をひとときも早く感謝できるようにやっていきたいとお祈りいたします。

お祈りいたします

父、御子、御霊でいてくださいます神様

まことに愚かな者であり、罪深い者でありますけれども、あなたは共にいましてわたしたちを守り通してください。どうかわたしも、わたしたちが愛する者も病の中にある者も、行き詰っている者も希望を失っている者もどうかそのあなたの・・・できますように。わたしたち、今一度思いを新たにして、この信仰に生きる者としてください。

足らざる祈り主イエス・キリストの御名を通しみ前におささげいたします。

アーメン